金光教の声

平成23年10月～12月放送分

NO.397

【もくじ】

《信心ライブ》
第一回　雨雨降れ降れ・・・・・・・・・・・・・・・1
《信心ライブ》
第二回　神様からのテスト・・・・・・・・・・・・・・5
《信心ライブ》
第三回　感謝のお葬式・・・・・・・・・・・・・・・10
すてきな101歳・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
神様のレール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
大正生まれ甲府のナイチンゲール・・・・・・・・・・22
人を育てる教師に・・・・・・・・・・・・・・・・・26
もっとお礼が言えればよかった・・・・・・・・・・・30
和らぎ賀ぶ心に・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
母のような生き方を・・・・・・・・・・・・・・・・39
伊賀忍法丸太積み・・・・・・・・・・・・・・・・・43
風船かずら・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
お父さん、がんばる・・・・・・・・・・・・・・・・52

《信心ライブ》

第一回「雨雨降れ降れ」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今日は、兵庫県の大林誠さんが、平成十六年十一月に、金光教のある教会でお話されたものをお聞き頂きます。

最近の多くの小学校では、一つの傘を二人で使う、いわゆる相合い傘ですね。別に男女と限らずに、とにかく二人で使うようなことを禁止しているところがたくさんあるそうです。

傘というのは、しょせん一人用に作られていますからね、二人入ったら二人とも濡れてしまいます。ちゃんと我が子は傘を持っていったにもかかわらず、なぜかぬれて帰ってきた。悪いのは忘れた子の方なのに、なんでその子のせいでうちの子がぬれなければいけないのよ、というふうに親は考えたのでしょうね。そういう声にまあ押されて、学校の方も、相合い傘禁止ということにしてしまった。

教祖様は、「難儀な人を見てかわいそうに思う心が神心だ」「その神心を行動に現して、人を助けるのが人間だ」というようなことを、さまざまなみ教えを通して教えて下さっておりますけれども、それとはまったく対照的になっておるのが今の世の中の現状なんです。

昔はね、傘が無くて困っていたら助けてあげ

るというのが、良い子のすることだ、と考えられていました。このことは、童謡の歌詞を見てもよく分かります。

皆さんご存じの『雨ふり』という歌がありますよね。あの歌の中で、とってもそれがよく分かるのです。

ちょっと歌ってみましょうか。みんな、一緒に歌って下さい。せーの、

♪あめあめ　ふれふれ　かあさんが
じゃのめで　おむかい　うれしいな
ピッチピッチ　チャップチャップ
ランランラン

ご協力ありがとうございます。

普通、雨というのは、あまり喜ばれませんね。ところが、この子は、雨が降ることを喜んでいますね。何でか？　大好きなお母さんが来てくれる。そのことを信じているから。だから雨さえもうれしいものになってしまうんですね。

♪あらあら　あのこは　ずぶぬれだ
やなぎの　ねかたで　ないている
ピッチピッチ　チャップチャップ
ランランラン

はい。大好きなお母さんと並んで歩いておりますと、それだけでもね、とても幸せなんですけれども、自分さえよければいいと、この子は考えておりません。向こうの方に泣いている友

達を目ざとく見つけます。何とかしてあげたいなという気持ちが湧いてくるんですね。そこでこの子はどういうふうにしたのでしょうか。

♪かあさん　ぼくのを　かしましょか
きみきみ　このかさ　さしたまえ
ピッチピッチ　チャップチャップ
ランランラン

まず、「僕のを貸してあげてもいいですか？」と、お母さんに聞いてみたんですね。するとこのお母さんは、「傘を忘れてきたのがいけないんでしょう。余計なことしなくていいの」なんていうふうには言いません。それは、今時のお母さんです。

「いいことに気が付いたわね。優しいいい子ね。ぜひそうしてあげなさい」。そう言って褒めて励ましてくれました。このお母さんの温かい応援を受けて、この子は勇気をもってね、「きみきみこのかささしたまえ」と自分の傘を差し出すことになるわけです。

♪ぼくなら　いいんだ　かあさんの
おおきな　じゃのめに　はいってく
ピッチピッチ　チャップチャップ
ランランラン

貸してもらう方もですね、なかなか立派だなあと思うのです。というのは、「そんなことしたら、君がぬれちゃうじゃないか」。きっとね、

心配して遠慮したんじゃないかと思うんです。そしたらね、それに対して、「僕はお母さんの傘に入れてもらうから大丈夫だよ。だから遠慮なく使って」と言って自分の傘を渡したわけですね。

こうして、先ほどから、お母さんと並んで歩いていたわけですけれども、こんどは一層ピタッと寄り添って、お互いの体温を感じながら幸せいっぱいで一つの蛇の目の傘で歩いていきます。

大きな蛇の目といいましても、きっと、ね、やはり二人で使いますと、子どもの肩も少々ぬれるでしょう。親の肩も、ちょっとはぬれるかもしれませんが、しかし、そんなことはちっともう苦にはならない。親子でくっついて歩く幸せとか、あるいは、人に喜んでもらえて良かったなあという満足感で、スキップを踏みながら歩いていくわけですね。

いかがでしたか？　童謡には、子どもたちはもちろん、大人にとっても大切なメッセージが込められているのですね。

さて、大林さんがこの歌から伝えようとしている大切なことは何でしょうか。

それは、困っている人を見て、何とかしてあげたいと思う優しい心です。そういう心になれれば、相手も自分も幸せになれます。そして、この親子のように、困った雨降りでも、うれしい出来事に変わっていくのです。

晴れの日もあれば雨の日もあるのが人生。誰

もが時には困ったことに出合いますが、そんな時こそ、優しい心をお互いに出し合っていきましょう。きっと、「ピッチピッチ　チャップチャップ　ランランラン」と喜べる生き方が出来ますよ。

《信心ライブ》

第二回「神様からのテスト」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。

今朝は京都にお住まいの山下浩子さんが、青年の集いで発表されたお話を、ごく一部ですがお聞き頂きましょう。

仕事をしながら学んだことというのは、本当にたくさんあるんですけれども、その中で一つだけ、お話をさせて頂きたいと思います。

私のいた職場では、普通のＯＬのようにパソ

コンと電話が一人一つずつデスクにありまして、ほんとに毎日電話とファクスに追われるようなすごく忙しい職場だったんですけども、ある時普通に仕事をしていますと、電話が鳴りました。

出てみますと、「経理の者ですが…」と言われました。

「今日はおわびとお願いがあってお電話させて頂きました」と突然言われまして、何やろう？と思って、「はいっ」て言いますと、「山下さんが入社されてから三年間、交通費が多く支払われていたので、少しずつでいいので返して頂きたいんです」と言われまして、ちょっとビックリしたんですけれど、「いくらですかぁ？」って聞きますと、「合計で十三万円です」って言われました。

「十三万っ…」と、ちょっとその時は正直ショックというか、十三万ってどれくらいやろうみたいな、一瞬分からなくなったくらいだったんですけど、だんだんとそのショックが現実的になってきて、…あーマジですかぁ…と思っていたんですが、当時の私にとっては十三万というのは結構な大金で、どうしようと思っていたんですけど、それを聞いた時にフッと、これは神様からのテストかも知れないなあ、と思いました。

神様が、「これは浩子はどうやって受けるんや」って聞かれてるんかなあって思うと、ショックを受けただけで終わっていたりですとか、さらに経理のミスをした人を責めたりですと

か、そういうことをしてしまうと、神様のテストに合格出来ひんわ、と思いまして、そういうことも全部神様のされることなんかなと思うと、特に腹が立つということも、ショックを受けるということもなくなりました。

会社に入ってから給料明細を見て、基本給がいくらで、どんだけ保険に引かれて、とかそういうことはまったく見てませんでした。だから交通費を多くもらっているということにもチェックをしていないから気付いていなかったんです。もし私がちゃんとその明細をチェックしていたら、気付いていたかも知れないし、そしたら早く連絡して、未然に防げたかも知れないなあと思ったので、その電話の時に、「いや、私の方こそちゃんと確認してなくてすみませんでした」ということを謝るというか、そういうことが言えました。

それを聞いて相手の経理の方も、ちょっと安心したような感じだったんですけれども、その言葉、「私こそすみませんでした」というその言葉は、神様が言わせて下さったなあと思います。いくらでも責めたりとか、しようと思えば出来る状況だったと思うんですけども、そこでそういう言葉を言わなくて済んだ、そういう神様のお働きを頂いたなと思います。

その経理の方が、「山下さんからも上司の課長と所長とに報告しておいて下さい。しておいてもらえますか？」と言われたので、「はい、分かりました」と言って、すぐに課長と所長とに言いました。

「そういうことだそうです」とあっさりと報告したんですけど、課長の方が、ちょっと、「ホンマに、ホンマにそんなんでいいんか」と言って、課長の方が経理と、「ホンマに返さなあかんのか」とか、「そっちのミスじゃないのか」とか、すごくやり合って下さったんですけど、しばらくして、「やっぱりアカンみたいや、裁判してもアカンみたいやわ」とすごい話が大きくなってしまって、すごく課長の方が残念そうに言われました。

私は全然残念ではなかったんですけれども、課長さんも忙しいのに、そういう私のために時間を使って下さって、ありがとうございましたと、そういう気持ちになりました。

毎月二万円ずつ返金して、お給料から引いて頂くということにしたんですけれども、特に小遣いが減って困ったとかそういうことはありませんでした。（ＦＯ）

これは五年ほど前にあった出来事を振り返りながら話してくれたものですが、いかがでしたでしょうか。

もし私だったら…。「そんな馬鹿な！　そっちのミスでしょ！　こっちは悪くない！」と、言いたくもなります。ところが、彼女はフッと思えた。「これは神様のテストかも」と…。

こんな風に自分の心が神様に向かう、それが信心なんですね。

「どうしよう…」と困った時、スーッと神様の方へ心が向いていく。すると、自分でも思い

もよらないことが起きるんですねぇ。彼女の場合、その一瞬の出来事の中で、口をついて出たのが、「私こそすみませんでした」という言葉だった。

さらに、自分が言いたいことも上司が代わって問い合わせてくれた。「私のためにそこまでして下さって…」と、何だかうれしい思いにさえなれた。

どうせ返さなければならないのであれば、お互いに気持ちよく決着するに越したことはありません。彼女はこの出来事を通して、争うことなく丸く収まるヒントを得たことでしょう。

私たちは、つい事柄に心を奪われ、そして取り乱し、自分を守ることに必死になりがちですが、自分の主張ばかりでは世の中収まりません。

ならば、心をスッと神様に向けてみる。

今日一日、前向きでも後ろ向きでもない。そう〝神様向き〟に過ごしてみてはいかがでしょうか。

《信心ライブ》

第三回「感謝のお葬式」

金光教放送センター

金光教の集会で行われた発表や講話などを録音で紹介する「信心ライブ」。今日は、平成十五年四月、金光教本部の祭典で行われた講話の一部をお聞き頂きます。話し手は岡山県乙島教会の教師、岩本徳雄さんです。ほんの数日前に百一歳で亡くなられたお父さんを偲んでのお話です。

それから年が改まりまして、今年の正月を迎えました。正月の元日祭に父は車いすで参拝をさせて頂き、教会長として皆さんに、恒例のあいさつをいたしました。

「皆さん、おめでとうございます。私は今年百一歳です。いずれお葬式がありますが、よそへ行くのじゃありません。天地に帰るんです。みんな天地から生まれてきて、天地に帰るんです。皆さん、自分がいつどこで生まれようと思って出てきた人がありますか？　そうじゃないでしょう。生まれて気が付いたら、男じゃったり女じゃったりしたんでしょう。じゃからみんな、この世に生み出されとるんです。死んだら元の天地に帰るんですから、悲しいことじゃないんです。おめでたいことなんです。ですから、黒白の幕で泣いたりするんじゃなしに、紅白の幕で、『おめでとう』言うてお祝いして下さい。それで万歳して下さい」

こういうふうにあいさつをしたわけでございます。それで私が、お葬式の時に万歳が出来るかどうか分かりませんから、皆さん練習しましょうということで、参拝者に立って頂いて、万歳を三唱いたしましたが、やっぱり皆さん照れくさくてですね、手が半分くらいしか上がらないという方も多かった。

そういう状態でしたが、だんだんと、さすがに百一歳の誕生日を一月三十一日に迎えてから、体が弱ってまいりまして、ついに三月十三日の朝、百一歳一カ月の長寿を全うさせて頂きました。大好きな孫娘に手を握られて、にっこりと笑って、ほんとに死に顔とは思えない、そういう姿でお国替えをさせて頂いたわけなんです。

いよいよその三日後に葬儀があります。当日、紅白の幕を張らせて頂きました。そして弔辞を上げて下さる方たちも、その父の信心というものの中身に触れて、心からお礼を申し上げるという、そういう弔辞が続いたわけでございます。

そしていよいよ最後に、私が遺族代表として、皆さんにあいさつをさせて頂きました時に、「皆さん、新しい御霊(みたま)の神の誕生を祝って、万歳をさせて下さい」ということで、皆さんに立って頂いて、万歳を三唱しました。

普通考えたらお葬式に万歳をするなんていうのは、異様な行動だと思いますが、本当に自然な形で、正月の練習の時以上に、みんな手がパッと上がりましてね、そういうお葬式をお仕えすることが出来たわけでございます。

「人間は皆、おかげの中に生かされて生きている。人間はおかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくのである」

こういう教祖様のみ教えがあるんですね。実は父は、こういう教祖様のみ教えに導かれて、その信心を百一年かけて頂くことが出来たと、私は思うわけなんです。そして、最近、私の胸の中にしきりに思われておりますのは、その父が生涯かけて私どもに身をもって体現してくれた信心、ご用というものを、私自身がしっかりと頂くということ、そして父のようには出来ないかも分からないけれども、表すという、そして伝えていくということ。そういう課題を頂いておるように思うわけなんです。

お葬式で万歳をしたというんですねえ。何と、すばらしいお葬式だなあ、と私は思ったんですが、皆さんはどうでしょうか。

自分の命も含めて全てのものを、神様からの賜り物と受け止めていったお父さんと、その信心を受け継いでいきたい、それが何よりの親孝行でもあるんだと、そういう思いを持った岩本さん。その両方の心がピタッと合ってこそ、こういうお葬式が実現したんだろうと思います。

生まれるのも、生きるのも、死ぬのも、みな神様のおかげの中と、きっぱり言えるほどの安心の境地は、決して空想なんかじゃなくて、人間が実際に到達出来るものなんですね。そのよい実例を、岩本さん親子は、示して下さっているわけです。

実はこのお父さんも、若いころは非常に不平

不満の多い人だったそうです。それが、金光教の信心に出合い、お礼を言う稽古に取り組む中で、しだいに感謝の心が育っていったというんです。

小さなことで腹を立てたり、嘆いたり、心配したりしがちな私としては、人生の大きな目標をもらったような気がします。

何十年もかけて到達された境地が、そう簡単にまね出来るはずはありませんけれども、千里の道も一歩から。まずは今日一日、心を込めて、「ありがとう」を言う稽古をしてみようと思います。あなたも、いかがですか。

「すてきな101歳」

金光教放送センター

きれいに整えられた髪、穏やかな笑顔の笹岡良美さんは、高知市にお住まいの元美容師。明治四十三年三月十六日生まれ、現在百一歳です。身近な人は皆、「笹岡さんのように年を重ねていきたい」とおっしゃいます。笹岡さんはどんな人生を歩んで来られたのでしょうか。

笹岡さんは、高知県の山間にある農家に生まれました。小学校もろくに通えず、厳しい生活でしたので、職業を持ち自立したいと思っていました。二十二歳の時、夢を叶えるため、意を決して家を飛び出しました。

知り合いに、高知市内のある美容室を紹介されました。美容師はやってみたい職業でした。しかし、そこは遊郭が近くにあり、お客様は皆、日本髪ばかりです。だんだん廃れてきた日本髪をやることに迷いもありましたが、他に行く当てもありません。気持ちが定まり、美容師としての修行が始まりました。

しかし修行と言っても現在とは違い、住み込みで雑用の合間に、師匠の手元を見つめ、夜、皆が寝てからまねてみるというものでした。笹岡さんはそこで五年間辛抱し、難しいお客様の要望にも応えられるまでに日本髪を習得しました。

その後、別の美容室に勤めることになりました。その美容室は、今までとは全く違い、何も

かもが洗練されていました。お客様の身なりもさることながら、言葉遣い、会話が知性に富み、まぶしい感じがしました。「ここで働ける。うれしい。先生の役に立ちたい。お客様に喜んで頂きたい」。そんな思いが笹岡さんの中に自然と湧いてきました。

その美容室の常連のお客様に、老舗旅館のおかみさんがいました。その方は熱心な金光教の信者でした。おかみさんは笹岡さんの仕事に対する態度を気に入って下さり、何かにつけて笹岡さんを気遣ってくれました。笹岡さんにとってもおかみさんは、美容師になって初めて気持ちを許せる人でした。そのおかみさんから、教会にお参りするよう誘われました。教会に参拝して御神前に座った時、二十二歳で家を飛び出してから、はじめてホッと帰る場所を見つけたような温かい気持ちになりました。教会の先生も満面の笑顔で迎えて、これまでのことを聞いて下さり、辛かったことが皆溶けていく気がしました。

数年後、美容室の先生が引退し、笹岡さんが後を引き継ぐことになりました。いよいよ独り立ちです。毎日神様に仕事に関わることを願い、勤めに出る。そうすると、神様に守られている安心感があるのでした。ありがたいことに、代

が替わってもお客様が、変わらず店に来てくれたのでした。

美容室では花嫁さんもたくさん作りました。それは、日本髪、お化粧、着付けと大変な技術のいることで、特に日本髪は苦労するところですが、笹岡さんは、前の店で五年間みっちり日本髪をやっていましたので、その技術が生かされました。前の店で辛抱したことが、神様のお導きを頂き、花開いたと笹岡さんは思いました。

美容界では次々新しい技術が入ってきます。そこからがまた勉強の日々でした。毎年一度東京へ行き、新しい技術を学び、高知のお客様に提供していきました。そこで時間を掛けて美容に取り組むことにより、お客様が喜び、店が繁盛し、師匠にご恩返しが出来る、そのことが何よりの自分の喜びであり幸せでした。笹岡さんの美容室は、新しい技術と日本古来の日本髪、その両方の技術を持つ店へと発展していったのでした。

だんだん店の評判が立ち、いつしか笹岡さんはたくさんのお弟子さんを預かるようになりました。お弟子さんを預かるということは、技術を教え込むことだけではありません。行儀作法、言葉遣い、お客様に気持ちよくお帰り頂けるよう教えるのには、まず自分から示していかなければなりません。自分が勉強していくこと、指導者になってからもその姿勢は変わりませんでした。

また、人を預かるということは、その人の人生を預かるということでもあります。お弟子さ

んたちが美容師の試験に合格すること、独立のこと、またその家族のこと、願いが膨らんでいきます。

毎日の教会参拝では、自分のこととして、お弟子さん一人ひとりのことを祈り続けました。お弟子さんたちも笹岡さんの期待に応え、巣立って行きました。その功績が認められ、笹岡さんはいつしか高知の美容協会の会長も務めるようになっていきました。

そこまでキャリアを積んだ美容師の仕事でしたが、七十歳を機にスパッと店をお弟子さんに任せ、引退します。笹岡さんの日本髪の技術は高い評価を得ていたので惜しまれましたが、お弟子さんのことを思うと、いつまでも私がいては育たない、欲は放さなければと思い切りました。十一月三十日をもって店を終えました。十二月は美容師にとって一番の書き入れ時です。そこから店を引き継げば経営しやすいのではという親心からでした。

引退後、笹岡さんは書道を始めます。

「神に向かえば人想い、人に向かえば神想い」

笹岡さんがこれまでの人生で、大切にしてきたことであり、生き方そのものの言葉です。引退後もお弟子さんが毎年新年会を開き、誕生日を祝ってくれます。お弟子さん一人ひとりの中に、「私のことを誰よりも祈り、いつも心にかけてくれている」という思いがあるのだなと思いました。

百一歳にしてお元気で、関わりのある人を祈り続ける笹岡さん。人生の節目で見せる潔さと、

南国土佐の温かい海に似た懐の深さを持つ、すてきなすてきな大先輩の女性でした。

「神様のレール」

金光教放送センター

若林和子さんは八十歳。三重県亀山市にお住まいです。平和の「和」に子どもの「子」と書いて「かずこ」ではなく「わこ」さんと読みます。夫の春一さんとは同い年。昭和二十七年の結婚で、まもなくダイヤモンド婚式。和子さんと、腕のいい大工さんだった夫の春一さん二人のなれそめには、ちょっとロマンチックなエピソードもあるのですが、それは、また、別のお話…。

結婚してから十年後、春一さんは、建設会社を起こしました。夫婦二人力を合わせて一生懸

命働きました。ゼロから始めた会社でしたが、年を追うごとに仕事も増え、従業員も三十名を数えるまでになりました。

順風満帆。ところが、もっと事業を広げようと大きな工事を引き受けたのがあだとなり、資金繰りが悪くなります。その心労もあったのでしょう、追い打ちを掛けるように、春一さんが体調を崩し、ついに入院してしまいます。

和子さんが金光教と出合ったのはこの時のことでした。同じ病室の、やはり付き添いに来ていて親しくなったご婦人から手渡された一冊の金光教の本。それが、和子さんを金光教の教会へ導くことになります。

「とにかくありがたいお話で。神さまがレールを敷いて下さったような気がして、何としてでも教会にお参りしたいと思いました」。和子さんは本を手にした時のことをこんな風に振り返ります。

翌朝、初めて金光教亀山教会にお参りした和子さんは、教会の先生に、春一さんの病気のこと、会社のこと、そしてこれまでの事情、心配事などなど、思いの丈を話しました。先生は、じっくり耳を傾け、神様にお願いして下さいました。

教会にお参りしては、神様にお願いし、先生に相談し…ということが、和子さんの毎朝の日課になりました。

そんな中で、和子さんは、だんだんと自分の気持ちが変わっていったと言います。周りの人たちや出来事がありがたく思えるようになって

いったのです。夫である春一さんのこと、会社の従業員のこと、取引先のこと、これまで携わってきたたくさんの仕事のこと、そして何でもないように思っていたいろんな出来事…。

春一さんの病気は手術も成功し、無事退院となりました。しかし会社のほうは、もうどうにもならなくなっていました。負債は六億円。一緒に頑張ってきた従業員のこと、お世話になった取引先のことを考えると、身も引き裂かれる思いでした。矢のような催促は激しくなるばかり。「資金繰りをしに行く」とだけ言い残し、夜逃げ同然に春一さんと和子さんは亀山を後にしました。

向かった先は海の奇麗な所でした。気晴らしにでもと思い、二人でやってきた海岸は、季節になれば潮干狩りや海水浴の観光客でにぎわう所でした。しかしその風景は、和子さんの目には何もない寂しいところに写りました。

その時、「いっそのこと死んでしまおうか」と春一さんが…。

どこまで本気だったのかは分かりません。しかし、この言葉に、和子さんはハッとしました。

「生かされている命を粗末にしてはいけない」思わず口をついて出たのは、春一さんを励ます言葉でしたが、和子さん自身にとっても思い掛けないほど心に響いたのでした。神様に、生かされている命なのだと。

結局、弁護士さんが間に入ってくれて、債権者会議がもたれることになりました。迷惑を掛けたことをただただ謝るばかりの二人に、取引

先の人たちは皆、「心配していたよ」「出来る限り応援するからね」と口々に温かい言葉を掛けてくれました。

「教会の先生も心配しておられたよ」。知人がそう教えてくれました。実は、教会の先生にも黙って姿を消してしまっていたのです。「先生は、突然、姿を見せなくなった私のことを案じて下さっていたんだ。私がお参りしなくても、ずっと神様にお願いし続けて下さっていたのだ」と和子さんは気付きました。

春一さんの病気、会社の倒産という大変なつらい出来事でしたが、周りの人たちが気に掛けてくれ、教会の先生からも願われている。それは、和子さんに助かってほしいと願っておられる神さまのレールの上を歩む道のりだったのかもしれません。

その後、以前取引のあった大手のハウスメーカーから、春一さんの腕を見込んで、新築住宅の内装の仕事が舞い込んできました。遠方の地域を一手に任され、夫婦泊まり込みで働くこともありました。二人だけの、しかも五十歳を過ぎての再出発です。しかし和子さんには、建築会社の社長さんとしてよりも、腕のいい大工さんとしての春一さんのほうがずっと好もしく思えたのでした。

今、和子さんたちは、借金の整理もつき、子どもたちも独立し、市街地を見渡す高台に居を構え、夫婦二人穏やかな生活を送っています。

そんな和子さんには日課があります。一日の

出来事を振り返って、帳面に書き留めているのです。ありがたかったと思うことや、家族やお世話になっている人たちのことなどなど。そして自宅の神棚の前で拝礼して、一日を終える…。教会の先生がお願い事の帳面をつづって神様にお願いしているのを知って、「私も」と思ったのがきっかけで、もう何十年も続けています。

「今は、もう、何もかもありがたいことばかりです」。和子さんはこんなふうに話します。自分のことだけでなく、みんなのことを願っていく。このことがまた、神様のレールを、先へ先へと繋げていくことになるのでしょう。

「大正生まれ甲府のナイチンゲール」

金光教放送センター

南に富士山、北に昇仙峡という日本二大景勝地を望む甲府盆地。

そのほぼ中心にある金光教甲府教会に参拝する浅川やす子さんは現在八十七歳。長年、看護師をされ、定年を迎えましたが、甲府市から功績が評価され、平成四年に、市内のへき地医療を委嘱されました。大きく背中も曲がり、持病も抱えていましたが、今年三月まで、元気にお役に立ってこられました。

やす子さんは大正十三年、現在の山梨県北杜市に生まれましたが、三歳の時に母親を亡くし

ます。お母さんは、「やす子、やす子」と最後まで名前を呼ばれていたそうです。まだ二十四歳の若さでした。

やがて、父親は後妻を迎え、三男二女の弟妹が生まれました。おばあさんは、やす子さんをふびんに思い、とても可愛がって育ててくれました。つらいことがあると、おばあさんは、「やす子はお母さんもいないし、器量もそんなに良くないから、皆からかわいがられ、好かれるようにしないといけんよ。それには、ひとの言うことを素直に聞くこと、勉強をしっかりすることが大事だよ」と諭してくれました。

やす子さんが十二歳の時、おばあさんも亡くなり、継母との関係も厳しい十代を過ごしました。

やがて、やす子さんは、医者になった叔父を頼って上京し、おばあさんの言われたとおり苦学して、看護師と助産師の資格を取得。叔父の医院を手伝いました。

その後、昭和二十三年に結婚して、古里の山梨に帰って来ました。

しゅうとめが熱心に金光教の信心をしていたことから、金光教甲府教会へ参拝。教会の先生から、「天地金乃神は一生死なぬ親である」との教えを受け、母親は亡くなったが、この神様は一生死なない親神様であるという安心を得て、参拝に励みました。

昭和二十五年には、市立病院の産婦人科の看護師、助産師として採用されました。ところが翌年、二十六歳の時でした。盲腸炎にかかり、

手術をすることになりました。すると、腸に菌が入り、うみでお腹がパンパンに腫れ上がりました。医療設備や医療品も不十分な時代で、手の施しようがありません。もう助かる見込みはないという診断でした。麻酔を打たれ、意識が遠のいていく中で、「これで楽になれる、この世とお別れ」と思い、深い眠りに落ちました。

そのころ、教会ではやす子さんが助かるようにとご信者さんが集まり、一生懸命祈ってくれていました。お医者さんたちの必死の看護の末、やす子さんは奇跡的に一命を取り留め、入院から七カ月と七日後、退院することが出来たのでした。

この経験から、やす子さんは、「私は二十六歳の時、神様に助けて頂いて生まれ変わったのだから…」と、戸籍上の年齢から二十六を引いた年を自分の年齢と思うようになったそうです。神様に祈って下さった方々、お世話になった方々のご恩に報いようと、いっそう看護と助産師の仕事に打ち込み、やがて市立病院では知らぬ人はいないと言われるほどの名看護師長となりました。

骨身を惜しまぬ看病で身体を酷使し、背骨はS字状に曲がり、何回もの手術で腹膜に穴が開き、無理をすると腸が飛び出してしまう状態。激痛に襲われながらも、新生児や妊婦を抱き抱えることも惜しまず看護に専念しました。

ある時、「双子の出産に立ち会い、二人目がなかなか出てこない時、『金光様、金光様』とお祈りし、無事出産出来た時の喜びは忘れられ

ません」とやす子さん。

定年退職後も、市からの要請で、児童の予防注射、新生児の検診や、訪問看護に力を尽くしました。さらに、平成四年からは診療所のない黒平地区での、いわゆる、へき地医療のため、医師に同行して看護の仕事を二十年近く続けました。

黒平では水晶の採掘が、大正から昭和三十年代まで盛んに行われました。取り尽くされた現在では、かつて多くの家族が移り住んだ山間集落も、高齢化しています。残された数軒の家にはお年寄りが多く、やす子さんは血圧や体温を測りながら、「肩こりには腕のつぼを押さえるといいですよ」とか、「足を伸ばす体操をしましょう」と、声を掛けて回ります。黒平の人々は、お医者さんとやす子さんが来る日を心待ちにされました。

幼くして母親を亡くし、つらかった十代を過ごしたやす子さん。結婚して、金光教と出合い、〝天は父、地は母〟〝天地金乃神は一生死なぬ親である〟の教えを胸に、驚嘆すべき精神力、人を思いやる優しさで、神様に祈りながら、多くの患者さん、新生児、妊婦さんらを長年看護してきました。「たぶんお母さんなら、こうしてあげただろう」と亡き母に思いをはせ、お世話をされてきたそうです。

看護師の仕事を始めて六十七年。今年三月、へき地医療のお役も免除となりました。退職された日には、市の職員や後輩の看護師さんたちから大きな花束と共に、惜しみない賞賛が贈ら

れました。

やす子さんは言います。「生まれ変わった二十六歳を引けば、まだ六十代」。

八十七歳になり、腰が大きく曲がった現在でも、教会に元気に参拝し、境内の草むしりに励んでいます。

〝天地金乃神は一生死なぬ親である〟の教えに支えられて、みんなに喜んでもらえるよう、いつまでも世のお役に立ちたいと願うやす子さんです。

「人を育てる教師に」

金光教放送センター

熊本市の小学校で校長をしている永溝晋介さんは現在五十五歳、教員生活は三十四年になります。

永溝さんは三歳の時、大きな病気が原因で右足が不自由となりました。彼のお母さんは親の薦めもあって金光教木山教会へ参拝しました。

その時、教会の先生から、「この子は病気はあるけれど、必ずお役に立つ人になるからなあ。だからこそしっかり勉強させなさいよ」と言われたのです。それからは〝お役に立つ人になる〟という願いをもって親子で教会参拝を続けました。

その後は順調に成長し、ハンディキャップがあるもののいじめに遭うこともありませんでした。それどころか周りの人や友達から支えられ、無事に大学まで進学出来たのです。今思うと両親はもとより、教会の先生が神様に願い続けて下さったおかげだと永溝さんは振り返ります。

大学卒業後、永溝さんは中学校の教師になりました。それまで自分のことをずっと神様に願って下さっていた教会の先生のところへ行き、うれしい報告をすると、先生はとても喜び、次のような話をして下さいました。

「教育という字は教え育てると書きますね。教師になったのなら、教えることは出来るでしょう。あなたは人を育てる教師になりなさい。人を育てるということは大変難しいことですが、とても大切なことです」

この〝人を育てる教師に〟という言葉は、それからの永溝さんにとって大切な意味をもつことになるのです。

永溝さんの最初の赴任先は、熊本県水俣市近郊の中学校でした。そこで彼は、自分のクラスの子や、その家族が公害病による差別や偏見を受けている姿を目の当たりにして、自分の無力さを思い知らされるのです。その時、〝人を育てる教師〟という言葉を思い出し、厳しい状況の中で、まずは話を聞かせてもらうことから始めていきました。話を聞いて共感するのが精いっぱいでしたが、そこから少しずつクラスの中で生徒たちが公害病を正しく理解し、偏見に負けない力を持ってくれるようになっていきまし

た。

数年後、熊本市内への転勤が決まった時、ある生徒から、「先生はここを離れたら公害病のことを忘れるかもしれないね」と言われました。その時、永溝さんは、その子の目をしっかり見詰め、「先生はね、決して水俣のことは忘れないから。どこに行っても、弱い人や苦しんでいる人たちの立場になって頑張るからね」と堅く約束をしたのでした。

熊本市内に転勤して二校目の中学校に赴任した時のことです。その学校はとても荒れていて、校舎の壁際に沿って歩けないほどでした。なぜなら、上の窓から机や椅子、牛乳瓶がいつ落ちてくるか分からないのです。授業中も勝手にうろうろしている生徒がたくさんいて、廊下や階段でおしゃべりしています。永溝さんは、そういう子どもたちを放ってはおけません。クラスも学年も知らない生徒たちの中に積極的に入っていくのです。最初はぎくしゃくした雰囲気でしたが、永溝さんの腹を割って関わる態度が子どもたちに通じたのか、次第に永溝さんにだけは話をしてくれる生徒も出てきたのです。

その数年後のことです。熊本市の繁華街で深夜、若者たちに取り囲まれました。当時、世間を騒がせていた〝オヤジ狩り〟かと恐怖を感じましたが、その中の一人が、「先生、俺のこと知ってるか」と聞いてきたのです。彼はあの荒れた中学校の卒業生でした。

直接教えたりはしていなかったけれど、廊下で話を聞いていた子どもだったのです。その子

の名前を呼ぶと、とても喜びました。この子たちは表面上は突っ張っているけれど、本当は人との関わりを求めているんだと胸が痛みました。

その後、永溝さんは生徒たちとの深い関わりを大切にしながら教員生活を続けていきました。子どもたちと関わる時、その子の持っている良い面を引き出したり、気付かせてあげることが大事で、すべての子どもに可能性があるという信念を持つようになりました。生徒が生き生きと輝く姿に出会う時、生徒のことで苦労したことは吹き飛んでしまいます。どうにもならない大変な時が何度もありましたが、そういう時こそ教会に参拝し、神様にお願いしながら取り組んでいきました。

永溝さんは中学校の教員を三十数年勤めた後、現在では熊本市内の小学校で校長をしています。最近、永溝さんは人を育てるというよりも、自分が一番育てられてきたと思っています。

「何より待つことが出来るようになりました」と話します。

永溝さんは、もともとせっかちで気が短いところがありました。例えば、毎朝校門に立って、生徒たちへ声を掛ける時の様子を見ると分かります。以前だったら時間ぎりぎりに来てる子には、「こらっ、走れ～！　急げ～！」と声を掛けていました。今は、「もうあと五分早く家を出ようね、そうするとゆっくり間に合うからね」といった具合です。

人が育つには時間が掛かります。永溝さんは

子どもたちに目線を合わせ、急がず、じっくりと構えて生徒たちを見守れるように変わったのでした。子どもを育てるには、こちらが心を落ち着かせて子どもの心に寄り添っていくことが大切なのです。

「人を育てる教師に」と教会の先生からお言葉を頂いて三十数年、常にそうありたいと願い続けてきました。「おかげで少しはお役に立てていると思います。これからも残り少ない学校の現場で〝人を育てる教師〟でありたいと願っています」。

最後にそう話す永溝さんからは、子どもたちを心から慈しむ温かさが感じられました。

「もっとお礼が言えれば良かった」

金光教放送センター

中込悦朗さんは、現在七十八歳。祖父の代からの信心三代目で、甲府駅から南西に十五キロほど離れた、南アルプス市にある金光教大明教会に参拝しています。

幼いころから両親に連れられて参拝し、小学生のころには夏休みに書道を習うなど、教会はいつも身近な存在でした。

中込さんは、大工の棟梁をしていた父親の頼みで、高校一年の時に中退し、大工見習いとなりました。空襲で焼け野原となった甲府市では、戦後復興に向けて、たくさんの大工が求められていたのです。

父親と一緒に電車で甲府に行き、朝早くから夜遅くまで、時には泊まり込みで家を建てる毎日が続きました。電車には高校の同級生も乗っていました。一足早く社会人として歩み始めた中込さんは、うらやましく思ったこともありました。将来への確かな見通しがあったわけでもなく、友人がいない寂しさもありました。

母親は、多感なころの中込さんの思いを察してか、夜遅く、クタクタになって帰ってくる中込さんを、寒風吹きすさぶ中で待っていて、おにぎりを手渡し、「映画でも見て帰っておいで」と、励ましてくれました。

中込さんは、そうした母親の優しい励ましを受け、教会の先生から頂いた〝先のことは心配するな。今日を一生懸命に〟との教えを支えに、大工修行に打ち込みました。

生まれつき負けず嫌いで頑張り屋の中込さんです。短期間で腕は上がり、十九歳の時には、父親と一緒に教会を建築出来るほどになりました。時には、無理と思えるような仕事を請け負ったり、無鉄砲と思えるようなやり方で、新しい仕事を紹介してもらうこともありました。

そんな中込さんのやる気と、棟梁としての父親への信用が相まって、仕事が増え、実績を積んで、山梨県の仕事を請け負えるほどに会社は大きくなりました。

父親が亡くなった後、三十二歳の若さで社長となった中込さんは、損得抜きで、人が受けないような地元からの頼みも受け、人間関係にも恵まれて、順調に事業を広げていきました。

四十代から五十代にかけて、二度、大病で入院・手術をしましたが全快し、その度、中込さんは、信心に支えられ、何事も前向きに受け止め、仕事一筋に生きてきました。そのことに悔いはありません。ただ、心残りなのは、十年前に、六十五歳で亡くなった奥さんのことです。

奥さんは、役場で働いていた時、仕事の関係で出入りしていた中込さんに見初められ、二十四歳で結婚しました。信心のない家から嫁に来ましたが、中込さんと一緒に、熱心に教会に参拝するようになりました。

いつも、ニコニコして、愚痴・不足を言わず、人を恨んだり、悪口を言うことは根っからありませんでした。そんな奥さんのことを、中込さんは、「まるで、教祖様の教えをそのまま生きているような人で、本当にいい人を嫁にもらった」と言います。

奥さんは亡くなる直前、娘に、「私は幸せだった。皆さんにありがとうと言ってくれ」と言い残しました。

中込さんは、その話を娘から聞いた時、「仕事柄、随分心配や気苦労を掛けていたのに、文句の一つも言わず、その上、死を目前にしてお礼まで言って…。そんな妻がいてくれたからこそ、自由に、思う存分仕事をさせてもらえたんだ」と思え、泣けてしょうがありませんでした。

また数年前、中込さんは一冊の大学ノートを見付けました。そのノートに、中込さんの母親を介護していた、奥さんの思いがつづられていました。

奥さんは、「私はお義母さんを精いっぱい介護しているつもりだ。だけど、怒られて怒られてかなわない。私を憎むような顔をして私を怒る。お礼を言ってもらわなくてもいいから、せめて怒らないでほしい。主人に申し訳ない」と書いていました。

それを読んで、中込さんはびっくりしました。中込さんにとって、いつも優しかった母親が、八十歳から亡くなるまでの三年間、下の世話をはじめ、何から何までしてもらっていた奥さんに、想像も出来ないそぶりを見せていたからです。

当時は、今でいう〝認知症〟という病名もなく、その症状も分かりませんでした。とはいえ、中込さんは、それほどの母親の変化に気付かず、介護してくれている奥さんのつらい思いを察することが出来なかったのを、今更ながら申し訳なく思うのです。

「きっと妻は、どれほどそのつらい思いを打ち明けたかったことか。でも、打ち明ければ、私に余分な心配を掛ける。そんなふうに思ってか、一言も介護の苦労を口にせず、『申し訳ない』と自分を責めていたのではないだろうか。少しでも、妻の苦労が分かり、慰めの言葉一つでも掛けさせてもらえば良かった。妻が生きているうちに、もっともっと『ありがとう』と言葉に出して、お礼を言ってあげられれば良かった…」と思うのです。

「妻は神様から贈られた最高の宝物だった」としみじみ語る中込さんは、「ずっと神様のお

守りと教会の先生のお祈りを頂き、家庭や仕事の上にも、そして健康の上にも、願い以上のおかげを頂いてきました。ありがたいことです」と感謝しています。

これからは奥さんに安心してもらえるよう、日々健康に心掛けるとともに、神様やお世話になった方々に、少しでもご恩返しをさせて頂けるよう、先のことを心配せず、元気に過ごしていきたいと願っています。

「和らぎ賀ぶ心に」

金光教放送センター

「亭主元気で留守がいい。こんな言葉がどこかのＣＭでありましたけど、ほんとにそうだと思いましたねえ、あの頃は」

こう話すのは、熊本県天草諸島の西北部、苓北町にお住まいの阪井良子さんです。良子さんたち夫婦は、結婚してからもう四十年近く経ちますが、夫婦がいつも一緒に暮らすようになったのは、ほんの九年前、夫が定年退職してからのことでした。夫は捕鯨船の船員で、南氷洋にまで出掛けていきました。いったん航海に出ると半年間は帰ってきません。戻ってきても、また一カ月も経たないうちに船に乗り込むという生活を続けてきたのです。

いつも夫の帰宅を楽しみに待ち続けていた良子さんですが、ずっと家にいるとなると、かえって夫の存在が息苦しく思えてきました。

夫は十八歳の時から船に乗り、最初はご飯炊きの仕事から、勉強を重ねて船長にまで上り詰めた努力の人で、炊事、洗濯、掃除、何につけても、良子さん以上に器用にこなします。「何をもたもたしているんだ！」「そんなやり方じゃダメだ！」と、細かいところにも指示が飛びます。

一方、良子さんにも、長年、家事も子育ても一人でやってきたという自負があります。夫の一言から口論が始まり、二、三日の間全く口を利かないことも度々ありました。

良子さんは若い頃から金光教の教会にお参りしています。教会の先生に夫のことを話すと、「ご主人は船の上で、一瞬も気を抜けない生活を強いられてきたんですから、無理もありませんよ。相手を変えようとするよりも、このことを、自分を変えるための修行として取り組んでみてはいかがですか」。

先生は穏やかに、しかしきっぱりと、こう言われたのです。

「おかげは和賀心（わがこころ）にあり、という教えがあります。〝わが心〟の〝わ〟には、和らぐという字が当ててある。〝が〟は、年賀状の賀で、よろこぶという字です。神様のお心に沿う素直な生き方を心掛けていると、おのずと、和らぎ賀ぶ心になる。神様のおかげは、そういう心に頂けるのです」

悪いのは夫の方なのに、と反論したい思いが一瞬、良子さんの脳裏をかすめましたが、ああ、ここが私の悪い癖なんだな、と思い直しました。素直に「はい」と言えない。人の言葉に耳を塞ぎ、それどころか人を責める気持ちにさえなる。

今の心のままでは、神様のおかげは受けられないんだろうなあ。先生の言われる、「和らぎ賀ぶ心」にならせてもらわなければ…。そう思った良子さんは、以前にも増して、先生が語られる金光教の教えの一言一言に、真剣に耳を傾けるようになりました。

そんなある日のこと。一人娘が嫁ぎ先から子どもたちを連れて遊びに来ていました。夫は娘たちが帰って行く時に、土産に持たせてやろう

と、魚をさばいて塩を当て、冷蔵庫に入れて準備していました。

ところが良子さんは早合点をして、同じ冷蔵庫に入れてあった生の魚を渡してしまったのです。

「おい、冷蔵庫に入れとった生の魚はどぎゃんしたか？」

「ああ、あれは渡しておきました」

すると夫は怒って、「塩もんば持たせろと言うとったろが！　今すぐ携帯に電話して、取りに行ってこい！」と言います。

どっちでもいいのに、と思いながら渋々電話を掛けると、娘はもう十キロほど先まで行っていました。良子さんは車を飛ばして交換しに行きましたが、「もう、お父さんったら」と娘もうんざり、孫たちも待ちくたびれてぐずり始めていました。

こうして生の魚を持ち帰りましたが、良子さんはムシャクシャして、夫と口を利く気になれません。魚を冷蔵庫に入れた後、夕食も作らずにプイと家を出て、近所にある福祉センターの温泉に出掛けました。いつも夫婦げんかをする度に、ストレス解消に来ている温泉です。

お湯につかりながら考えました。「自分を変えるための修行」だと、教会の先生は言われたけれど、やっぱり今日も素直に、「はい」と言えない自分だったなあ、と。

夫があんなに口うるさいのは、長年、失敗が許されない厳しい職場で働いてきたからです。生の魚にこだわることにも、わけがありました。

夫は退職した今も、漁に出たり、船の操縦技術を教えに行ったりして、朝早くからとっぷり日が暮れるまでよく働きます。夜八時を過ぎてから遅い夕食と晩酌を楽しみ、疲れを癒すのが日課なのです。そこで欠かせないのが刺身と焼酎。それは、海の男の体に染みついたライフスタイルでもあるのでしょう。

そう思うと、夫に対する感謝の気持ちが湧き上がり、同時に、刺身がないぐらいで取り乱してしまうところが可愛くも思えてきて、クスッと笑ってしまうのでした。

「ああ、神様は本当にすてきな人と巡り合わせて下さった。ありがとうございます」。温泉で体が芯から温まるように、良子さんの心も神様のありがたさに浸って、じんわりと温まっていきました。

家に帰るとすぐに、「今日は本当にすみませんでした」と、自分でもびっくりするくらい素直に言うことが出来ました。夫の返事は「おう」と一言だけでしたが、食卓を見ると、先ほどの魚が夫の見事な料理の腕前で、刺身や煮付けに姿を変え、良子さんの帰りを待ち受けていました。

近頃は夫も良子さんにならって、度々教会にお参りするようになっています。

「信心は楽しいですね。自分の心を改めれば改めただけ、神様がそれに応えて下さるんですから」

そう話す良子さんは、「和らぎ賀ぶ心」を日々の目標にしながら、今は最愛の夫との二人暮

らしを心から楽しんでいます。

「母のような生き方を」

金光教放送センター

太平洋に面した高知県須崎市で暮らす堅田潤平さんは、昭和十四年生まれの七十二歳です。二十二歳で中学校の英語の先生となり、のちには、県の教育委員会などで要職を担ってきました。そして、現在も、学校の支援や教育に関わる調査・研究を行う教育行政の一機関である教育研究所の所長として元気に仕事に励んでいます。

堅田さんは、働き者のお母さんの姿を見て育ちました。お母さんは、炊事や洗濯に、また、畑仕事にと、休む間もなく働き、じっとしてい

ることがない人でした。何事も粗末にすることを嫌い、「ありがたい」というのが口癖で、どんなことが起こっても平然と対処できる、物事に動じない人でもありました。

お母さんの、そんな生き方にひかれていた堅田さんは、熱心に金光教を信仰するお母さんの姿を通して、「金光教を信心すれば、母のようになれるのだ」と、漠然と思っていました。そんな青年時代の堅田さんは、時々、教会に参拝してはいましたが、それは、あくまでも堅田さんなりの親孝行でした。自分が教会へお参りすると、お母さんが喜んでくれる。それがまたうれしくて、堅田さんの足は、教会へと向かうのでした。

堅田さんは、二十五歳の時、悦子さんを妻に迎えます。長女と長男を授かり、やがて愛媛県に近い山あいの村の中学校に家族と共に赴任して、幸せに暮らしていました。

村に赴任して三年を迎えようとする昭和四十九年の初め、三十五歳になった堅田さんは、仕事上の大きな転換期を迎えます。

当時は、不便な山あいの学校で三年勤めれば、沿岸部へ異動出来る、というのが一般的でした。出身地の須崎市に戻る日を心待ちにし、家まで新築していた堅田さんは、教会に参拝し、「転任を考えている」と話しました。ところが、教会の先生は、「村にも子どもがいる。御用だからな」と言われるのでした。心から信頼する教会の先生の、「御用だからな」という言葉が、ずしりと堅田さんの心に響きました。

金光教では、〝御用〟という言葉を、〝神様から与えられた役割〟とか、〝神様のお役に立つための大切な仕事〟という意味で使います。

須崎市に戻りたいという堅田さんの思いとは正反対の、思い掛けない先生の言葉でしたが、「母のように、先生の言葉を神様のお言葉として受け止めよう。あの村で、神様の御用として私がなすべきことがあるに違いない」と心を定めました。それは、お母さんのような生き方を求めての大きな一歩でもありました。

それから程なく、「この一歩を神様が喜んで下さっているのかな」と思えるような出来事が待ち受けていました。堅田さんが顧問を務めていたソフトボール部が、春の高知県大会を制して優勝したのです。山あいの村では、スパイクもなく運動靴で練習してきたチームの優勝を祝って提灯行列が行われ、喜びに満ち溢れたのでした。

スポーツだけではありません。高校受験にしても、何学級かある中で、堅田さんが受け持ったクラスだけ、進学を希望した生徒全員が高等学校に合格するのです。堅田さんは、教会へ足を運び、生徒たちの合格をお願いしてはいましたが、特別な進路指導をしたつもりはありませんでした。けれども、それが毎年続くので、周囲から不思議がられるのでした。

「神様から託された子どもたちが、心と体を鍛え、勉学に励んで、たくましく成長していきますように」とお願いし、与えられた役割に心血を注いでいく。そんな堅田さんの生き方や勤

勉で温かい人柄が、生徒一人ひとりの、「頑張ろう」という気持ちを引き出し、目覚しい成果として現れることになったのです。

こうした学校での実績が評価され、堅田さんは、教育行政の職務を担当するようになり、昭和六十三年には、高知県中央部管内の小学校職員の人事を一手に引き受ける、管理主事となりました。責任の重さと忙しさから、体調を崩して職場復帰出来ない人も多い仕事でしたが、〝神様の御用〟と心得て仕事に打ち込みました。

ところが、新年度に向けた人事異動の発表を目前に控えた大切な時に、座っていることすら出来ないほどの激しい腰痛になってしまいます。それでも堅田さんは、「横になれば、ましだから」と、妻の悦子さんが運転する車で出勤、寝そべった状態で仕事を続けました。

ちょうどその頃、家庭では、長女の就職や、高等学校を中退した長男のことなど、心を痛めてきた問題がありました。けれども、腰痛を押して仕事に打ち込む父親の姿が、二人の子どもの心を打ち、やがて二人とも教育の世界で活躍する道が開けていったのです。

「あれは、十日間ほどの腰痛でしたが、他の方と比べ、軽い病でしのがせてもらうことが出来、子どもの進む道まで開けたのですから、ありがたいことでした」と、当時を振り返っては心から幸せに思う堅田さんです。

いま、堅田さんが所長を務める教育研究所は、かつて村を挙げて優勝を祝福してくれた、あの

山間部にあります。当時から培われた信頼が、今に繋がっていることは、言うまでもありません。どんなことでも、神様が与えて下さった〝神様の御用〟として打ち込み、仕事に手を抜きさえしなければ、誰もが幸せになれるのだと、堅田さんは確信しています。

仕事を終えたその後に、夫婦で教会へ参拝し、「一日ご苦労様でした」という先生の言葉を、神様からのねぎらいの言葉として聞く堅田さん。

「母の信心に近づけただろうか？　いや、まだまだだ…」と、自らを見つめては、明日への決意を新たにしています。

「伊賀忍法丸太積み」

金光教放送センター

「オレ仕事辞めた、ログハウス造りたいねん」

浩子さんの夫はそう言って、結婚十年目のある日、勤務していた一部上場企業を何の相談もなく退職し、妻と三人の子を残して、大阪からドロン…と一人姿を隠してしまったのです。まるで忍者のように…。

行き先は奈良の山奥。忍者修行ならぬ、ログハウス造りを学ぶためでした。夫の胸の内に、ログハウスへの熱い思いがあろうとは、気付きませんでした。

ここは三重県の伊賀上野。周囲を山に囲まれ

た、忍者で有名なこの街に住む広岡浩子さんは、五十五歳になる健康的でポッチャリした明るい女性です。今でこそ笑って話せる夫の脱サラも、安定した暮らしを何より望んでいた彼女にとって、目の前が真っ暗になるほどのショックを受けたのでした。それは浩子さん三十二歳のこと。そして彼女が信心をやめていた時期でもありました。

ログハウスとは、丸太を積み上げて造られた家で、避暑地などで見かける、素朴で木のぬくもりを感じる造りの家です。

ご主人は半年の訓練を受け独立。仕事は始めたものの、不安な日が続きました。二年後に、ここ伊賀上野に会社を設立し、ほどなく、家族も住み慣れた大阪を離れ、引っ越して来ました。何も分からず紹介された家に、家族五人と三人の職人さんが住む生活が始まったのです。唯一の安心は、八人が暮らしても十分生活していける、この大きな借家でした。

引越しも済み、落ち着いたころ…、浩子さんが庭の草取りをしていると、「広いから大変でしょ」と大家さんも手伝ってくれました。手を動かしながら、会話も弾み、浩子さんが以前、金光教の教会にお参りしていたという話になったのです。

大阪で生まれ育った彼女は四歳の時、のど仏に腫瘍(しゅよう)が見つかりました。お医者様は、「神経が集まっているところだから、手術をしなければならないが、それでしゃべれなくなることもある」と言うのです。彼女の母親は、そんな可

哀相なことを…、かといってこの腫瘍も放っておけない…、とその板挟みに葛藤し、いっそこの子を連れて死のうと思ったのでした。

それを知った浩子さんのおばあちゃんが、「金光さんへ行こう、行って助けてもらおう」と親子を教会へ引っ張って行ったのです。教会へ行くと先生が話してくれました。

「神様がお医者様の手を借りて手術して下さるから、絶対に手術をしてもらいなさい、神様に助けて頂きましょう」

その言葉は母親の心を神様に向かわせるのに十分でした。親も心が定まり、彼女は手術を受けたのです。

手術は無事成功。声も出て普通にしゃべれます。ただお医者様が言うのには、「腫瘍は取ったが、六年生までに再び出来ると小児ガンは治療が難しい」とのこと。すると今度はおばあちゃんが、「そんなら浩子が十三歳まで何もなければ命はもらえるんだ」と言って、教会の先生に、「十三参りの年まで何としてでもこの子の命を救うて下さい」と頼み、次の日から毎朝始発の電車に乗ってお参りを続け、必死で神様に向かってくれたのでした。

そのかいあって、浩子さんは無事十三歳の誕生日を迎えました。病気は再発しなかったのです。浩子さんは命を助けてもらった神様に自然と心が向かいました。それからは、おばあちゃんのように毎日、教会へお参りしました。しかし短大を卒業して就職したのをきっかけに時間が取れなくなり、次第に教会から足が遠ざかっ

ていったのです。

その後、社内でご主人と出会い結婚。子どもも授かり大阪で普通の暮らしをしていた浩子さんが、将来に不安を抱えながらこの土地に来たのだと、これまでのことをあれこれ話したのです。

ところがそれを聞いた大家さんは、「ああっ、うれしい」と手放しで喜ばれたのです。

実はこの大家さん、他人に家を貸すのが初めてで不安に思っていました。そこで、いつもお参りしている金光教の上野教会へ行って、教会の先生に、「どうか神様、おうちへ入って頂く方を探して下さい」とお願いしてあったというのです。

浩子さんの話を聞き、そうと知った大家さんは、「金光様の教会にお参りしていた人が家を借りて下さった」と大感激。すぐに一緒に教会へ行こうとなり、こうして浩子さんは十四年ぶりに教会の門をくぐったのでした。

神様から遠ざかっていた浩子さんの心の中で、金光様の信心が、「バン！」と音を立てて再び開けた瞬間です。着くと、教会の奥さんが、「よお来たなあ」とまるで家族のように迎えて下さり、実家へ帰ったような思いがしたのでした。

やっぱり私には神様しかないんだ。みんなの祈りに包まれて今の私があるんだ。彼女の心は再び神様に向かったのでした。頑張る夫の姿を見てはそっと手を合わせ、家族や関わりのある一人ひとりの幸せを願うその日その日が、感謝

の心で満たされていくのでした。その祈りの暮らしも今年二十年。夫が建てたログハウスは百軒を超えていました。

一本の丸太は、幾重にも重ねられた年輪がある。その重なりは、まるで毎朝一生懸命にお参りしてくれた、あのおばあちゃんの祈りそのもの。そうした、おばあちゃんや母親、先生たち一人一人の祈りの上に祈りが重なるように、丸太が積み上がり、出来上がった一軒のログハウス。それはまさに、幾つもの祈りに温かく包み込まれてきた、浩子さん自身だったのでした。

「風船かずら」

金光教志筑教会　地田治美

暖かく心地いい春の日差しが降り注ぐある日のこと。買い物から帰って来ると、隣の奥さんが庭で苗の植え替えをしていました。

「こんにちはー。それは何？」

「フウセンカズラよ…」

風船かずらと聞いて、赤茶色に熟した実が思い浮かびました。夏になると白い小さな花が咲き、緑色から赤茶色に色づく紙風船のような実がなります。風に飛ばされてしまいそうなはかなげにぶら下がる実を見ると、何となく涼し気で癒される感じさえします。

やがて訪れる夏の暑さを想像しながら、その暑さの中で癒される感覚を思い起こしていると、奥さんは作業している手を止め、私の方に顔を向けて、「もともと、最初はあなたのお母さんから苗をもらったんよ。もう二十年くらい前かなあ」と、ほほ笑みながら言葉を続けました。

「えーっ！　そうなん！？」。驚きと感動が入り混じって、思わず声が裏返りそうでした。

長い間大切に育ててくれていたんだ…、という嬉しい気持ちとありがたい思いがわき上がり、母の笑顔がよみがえりました。

母が亡くなって十三年が経ちます。花を育てるのが好きで、ベゴニア、アッツザクラ、ミヤ

コワスレ、テッセンなど色々な花を鉢植えで育て、楽しんでいました。隣の奥さんに分けてあげたように、友人たちに苗をあげたり、咲いた花を鉢ごとあげたりするのも楽しみのようでした。

そんな母が脳出血を起こして倒れたのは、平成十年一月十七日の早朝でした。救急車で病院に運ばれ、検査や処置を受けましたが、意識不明のまま二週間が過ぎ、一月三十日に息を引き取りました。

二週間の間は、返ってくる言葉や表情を想像しながら、ベッドの上で目をつむったままの母に、話しかけたり問いかけたりしていました。二十七日の六十二歳の誕生日には、こっそり小さな声でハッピーバースデーの歌を歌ってお祝いしたことも思い出します。

突然の出来事に母を知る人たちも驚き、死を惜しんで下さる方がたくさんいました。葬儀からしばらくたって、母を偲ぶかのように思い出話をして下さる方もいました。

母がよく利用していたショッピングセンターのスタッフの方は「いつもニコニコ、ハツラツとして、『こんにちはー』って言う、おかあさんの元気な声とあの笑顔に、どれだけ元気をもらったか分からない」と、涙ぐみながら話して

くれました。

印象的だったのは錦糸卵の話でした。子ども会の行事でちらし寿司を作ることが決まり、手分けをして下ごしらえをして集まることになりました。でも、錦糸卵作りを担当する人が、なかなか決まらなかったそうです。手間がかかるからやりたくない…という空気が流れていて、それを察してなのか「私してくるわ」と、母が自ら引き受けたそうです。だれもが思わずホッとした表情になり、空気も和んだらしいのです。

さらに当日、細く均等に刻まれた見事な出来栄えの錦糸卵に「ワーきれい～」とため息交じりの声が上がり、皆感心したんだという話でした。「このことに限らず、本当にお母さんは感心な人だった」と、話をしてくれた奥さんの言葉と、感慨深そうに話していた様子も心に残っています。

何事にも心を込めて取り組む母の姿が思い出されました。私が幼い頃から「金光教の信心は難しいことないんやで。何でもありがたく思うていったらええんよ」と、言い聞かせては、ありがたい思いを現すかのように、物事を大切にし丁寧に心を込めて取り組む姿を見せてくれていました。こちらが急いでいる時は、イライラしてくることもあるくらい丁寧で、手を抜くということがありませんでした。

「何でもありがたく思うていったらええんよ」。聞き慣れたはずの言葉でしたが、この言葉を思い出しては、日常の生活の中で、どれだけありがたい思いを持って過ごせているかと振

り返ったり、服をたたむ時、料理をする時、掃除機を使う時、何をする時も心を込めて出来ているかと、より意識を持って過ごすようになりました。

数年後、金光教の本を読んでいると、次のような言葉がありました。

〝金光教の教祖は喜びの道を開いて下されたのだから、信心する者が、喜ばないつらい顔をして日を過ごしてはならない。天地の親神様を信心するのだから、天地のような広い心にならねばならない〟。

この言葉に出合った時、生き生きと元気に街を駆け回っていた母の姿と重なり、きっと母の根ざしていた生き方だったんだと思えました。そんな母に習って、喜ばない、つらい顔にならないよう、ありがたい思いが現れるような、喜びあふれる笑顔で過ごしていこうと、心掛けるようにもなりました。

隣の庭の風船かずらが、どうか今年も花が咲き、実がなりますように…。

風船かずらの黒い種には、白いハート型の模様があることを教えてくれたのも母でした。小学生だった私は、手のひらに乗せられた小さな種を、目をクリクリさせながら見つめていました。ハート模様が不思議で、すっかり見とれてしまっている私の顔を見て、母はニッコリほほ笑んでいました。

母も大好きだった風船かずら。その風船かずらが大切に育てられ、命が続いているように広

い心を持ち、ありがたいと思う心、喜びの心で生きた、母の心もつないでいきたいと思います。

「お父さん、がんばる」

金光教松阪新町教会　水野照雄

私の奉仕する教会にお参りしている方の話です。坂本さんは四十歳の男性。結婚して十年目でしたが、いろいろあって離婚することになり、小学生の二人の子どもたちは奥さんに引き取られていきました。

まだ離婚話が出る前、「稼ぎが少ないくせに、お酒を飲んでばかり。子どもたちのこともほったらかしにして」と奥さんから責められたことがあったそうです。

そのことを、「痛いところを突かれて」と、坂本さんは悔しそうに話していましたが、奥さ

んがそのように言うのにも理由はあって、結婚した時より収入が少なくなっていたのは事実でした。トラブルがあって以前の会社を辞めざるを得なくなり、三交代制の工場に転職することになった…こんなことが数年前にあったのです。

お酒の量が増えたのは、その頃からでした。転職前後のストレス、また、慣れない三交代勤務に睡眠を合わせるために、ということもその理由だったようです。坂本さんにしてみれば、「それも家族のためを思えばこそなのに妻は理解してくれない」ということになります。

しかし、子どもたちと接する時間も少なくなり、その少ない時間もお酒を飲んで酔ってしまっている、ということになると、奥さんにしてみれば、そんな夫の姿は不満だったでしょうし、収入が減ってくれば将来への不安も募ったことでしょう。

坂本さんが毎日のように教会へお参りするようになったのは、この転職の頃からでした。とにかく通勤の時にお参りしては、神様を拝んでいきます。私も、坂本さんから、仕事のことや家庭のことで何かあるたびに話を聞き、神様にお祈りをしていました。

それだけに、離婚という結果になってしまったのは、私にとっても残念なことでした。

離婚成立からしばらくして、坂本さんの仕事の上に転機が訪れました。上海に新しい工場を立ち上げることになり、スタッフの募集があったのです。

応募するかどうか、最初は少し迷ったそうです。全く知らない土地、言葉も分からない国ですから、不安もあったでしょう。そこを決断させたのは、ここから心機一転、いつか子どもたちに頑張るお父さんの格好いい姿を見せてやりたいという思いだったそうです。

結果、採用となり、今は、現地工場立ち上げに向けて、まずは国内で研修を受けながら、週末には中国語教室に通っています。

「覚えることもたくさんあります。現地スタッフの指導というのも結構プレッシャーで…」坂本さんはこんなふうに話していましたが、以前と比べてその表情はずいぶん明るくなっていました。

ある日、「一年ぶりに子どもたちと会うことが出来ました」と言って、坂本さんがうれしそうにやってきました。久しぶりに元奥さんに連絡を取って、「息子の誕生日にプレゼントを買ってやりたいのだけど…」と申し出たというのです。

実は、こうすんなりと事が運ぶとは坂本さん自身も思っていなかったそうです。その前の時には、売り言葉に買い言葉のようなやりとりになり、お互いに気まずさだけが残るような結果になってしまったのが、今回は、不思議と冷静に話が出来たそうで、坂本さんと子どもたち二人とで買い物に出掛けることになったのでした。

「息子は四年生になっても相変わらずお調子者で、今買ってやったばかりのサッカーボール

をお店の中で蹴りたいと言い出すし、下の娘は二年生になってまた背が伸びたようで。お兄ちゃんに便乗してちゃっかりおねだりしてきて…」

子どもたちのことを話す坂本さんは泣き笑いのような顔になっていました。

そして、久しぶりに、自分の両親にも孫たちの声を聞かせてやることが出来た時には、さすがに涙があふれそうになったとも話していました。

坂本さんは言います。「上海に行ってしまえば、子どもたちと会う機会も少なくなります。それでも、この前に会った時、二人とも以前と変わらずにいてくれたので少し安心出来ました」。そしてこうも言いました。「彼女も、女一人で、仕事しながら、子ども二人育てているのだから、それは大変だと思います」。

金光教の教祖は、「夫婦は他人の寄り合いである。仲良くすれば一生安心に暮らすことが出来る」と教えています。もともと他人である二人が、不思議な縁によって結ばれて夫婦になる。だからこそ、お互いに思いやりを持ち合うことが大切なのだということでしょう。

そして、この言葉は次のように結ばれています。「夫婦げんかをしても、後から心が折り合う時、よく考えてみるとわけがわかる。それは、神様から与えられた魂の働きがそうさせているのだ」。

坂本さんたちが、だんだん自然に接することが出来るようになってきたのは、時間が経ち、

距離を置き、環境が変わったからということだけでは、決してありません。

自分は悪くないと思い相手を責めてばかりいたことに気づき、相手の立場を思いやる心を持つことが出来たということ、そして、その思いが相手にも通じたということ…。このような魂の働きがあればこそなのです。

「願うのは子どもたちが幸せであって欲しいということばかりです。そのためには彼女にも…」。いつだったか坂本さんがポロッと口にした言葉です。

その願いがかなうよう、いつか格好いいお父さんの姿を子どもたちに見せてあげることが出来るよう、私も一緒に祈り続けていこうと思っています。

金光教本部　ラジオ放送係

【住所】719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320
【電話】0865-42-6453
【FAX】 0865-42-2114
【メール】 w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

北海道放送	（土）	午前５時１０分	山陽放送	（日）	午前６時３５分
東北放送	（日）	５時００分	中国放送	（土）	５時５０分
ニッポン放送	（日）	４時３０分	南海放送	（日）	６時００分
東海ラジオ放送	（金）	５時２５分	RKB毎日放送	（日）	６時５０分
和歌山放送	（日）	６時５０分	宮崎放送	（日）	７時１０分
朝日放送	（水）	４時５０分			

こころで聴くおはなし

http://www.konkokyo.or.jp/radio/